神々のいない世界で

雷帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神々のいない世界で

【Ｎコード】
Ｎ７５３４Ｕ

【作者名】
雷帝

【あらすじ】
ある時、神々と呼ばれる存在が世界を作った
生み出した種族達と共に世界を創世した神々は、ある時「もう自分達の力は不要である」として、後を託して旅立った
しかし、神々が旅立った後、世界を滅ぼす終焉をもたらす混沌の大精霊が何故か誕生してしまう
残された者達は、混沌の大精霊とその配下である合成獣と戦い、何とか残された者達の中で世界の管理を託された六柱の存在が混沌の大精霊を封じる事に成功するが、彼らもまた眠りについてしまう

混沌の配下たる合成獣と戦いながら、世界は今も尚続いている
これは、そんな世界に生まれた、異世界の特に役に立つ訳でもない
記憶を持って生まれた一人の獣人の物語である

プロローグ

ただ、ひたすらに木刀を振る。
獣人特有の能力である気をまとわせ、また振る。
ひたすら無心になるまで振り続け、やがてぴたりと柄を顔の横へ、本体は天を突くように空へと向ける。
すう……と一つ大きく息を吸い込み、大きく踏み込む。
眼前の鎧をまとった木人形に木刀を振り下ろす。そこに何もないかのように一撃は振り抜かれ……一拍遅れ、ずるりと鎧ごと断ち切られた木人形は崩れ落ちた。
ちらりと木刀に視線を向ける。
彼の予想通り、そこには輝が入っている。まだ駄目か、と、未だ自分の未熟を実感させられる。
どちらだろう？ふとそう思う。
単純に気の量が足りなかったのだろうか？
それとも気の制御がまだ上手くいっていないのか？
或いは太刀筋で無理があったのか？
何かの要因があるはずだ。
木刀をただじっと睨んでいる彼だったが、そんな彼に声をかけてきた者達がいる。
「何だよ、オウル。またやってんのか？」
声の主は知っている。同じ村の幼馴染の一人だ。
いや、その後ろに或いは苦笑して、或いは興味津々に、或いは呆れたように子供達がいる。そういえば、こいつはガキ大将だったな、とふと思った。
「ああ、まだまだ未熟だし」
そう応えると、深い溜息をついて、先程断った木人形に視線をやる。
「いや、こんだけ出来りゃ十分だろ？」

俺らまだ子供だぜ？大体、こんなん出来るの俺らの年代じゃお前ぐらいだろ？
そう言うが、強くなったと思えた時には、逆に少しは追いつけたかな、と思ってた相手との差がよりはっきり分かるんだぞ？
そんな会話を交わすとガシガシと頭を？いて言った。
「そりゃお前、上を見すぎだ」
そうだろうか？
「つーかさ、お前も偶には付き合えよ、これから皆でかくれんぼするんだ」
どうやら、それで誘いに来たらしい。
かくれんぼか、それはいいな。俺達のそれは、人族のそれとは違って大騒動だけど。
森の中を駆け回り、気配を消し、それでも気付いて追ってきた相手から逃げ回る。いい鍛錬にもなる。
「いや、だからお前……まあ、いいや。参加するんだな？」
ああ、と頷くと木刀を棚に置きに行く。
そんな俺から視線を外した幼馴染が、ぽつりと呟いた言葉は聞く事はなかった。
「……本当に、俺らの年でこれが出来た奴なんていねえんじゃねえか？」
その視線の先には、壊れた木人形が、鋼の鎧ごと断たれて転がっていた。

この世界の正式名称を何と言うのか、それは知らない。
この世界を作ったのは神々というが、彼らの名前も俺達は知らない。
分かっているのは、彼らがある時、何処からかやって来て、混沌を素材として加工し、この地に世界を作った事だ。
神々はその手伝いとして、そして将来この世界を管理するものとして【六柱】と俺達が呼ぶ存在を生み出した。

すなわち『真竜』。
火水土風の四系統を統べる『大精霊』達。
そして『獣王』。
やがて、世界が十分に育ったとみた神々は【六柱】に後を託し、彼ら自身は再び何処かへと旅立った。或いは神々とはそうした世界創造を行う役割を担った集団であるが、管理を行う力はないのかもしれない。いずれにせよ、聞ける機会などはないだろうが。
何しろ、【六柱】も眠りについている今の世では……。

プロローグ（後書き）

大幅に変更
殆ど一から書き直しw

第一話 冒険者の日常（改）

【迷宮】内部は静かだ。

無論、例外も多々あるが、通路などは音を吸い込んでしまう。石のような質感でありながら、軽いコツコツという音しかしないというのは何故だろうか？

とはいえ、俺はともかく、他の連中は装備の関係上、どうしても【迷宮】以外の物が立てる音でそれなりに賑やかなのだけれど。もっとも、俺達の種族の耳は他の種族に比べて優れているから、そう感じるだけなのかもしれないが。

「オウル、今の所どうだ？」

一際賑やかな男が鋭く周囲に気を配りながら尋ねてくる。彼は人族の神官戦士であるジンだ。賑やかなのも当然で、彼は全身甲冑をまとっているからだ。見た目程重くはないのだと聞いてはいるが、金属の塊となれば、それなりの音がする。

「こっちは今の所は何もない。……メルキィさんは？」

こちらは俺以上に音がしない訳だが。まあ、獣人族の女性にして軽戦士兼盗賊たるメルキィさんが賑やかだったら、それこそ仕事を変えた方が良いだろうが。ちなみに、さんづけしているのは彼女の方が俺より年上だからだ。

年上と言うと、あまりいい顔をしないが、まだまだ若いのも確かなんだがな……。

「うーん、何だかこの先から微かに嫌な感じがするにゃ」

そう言われて、一同気を引き締めた。

獣人族の女性は、同じ獣人族の男性よりは嗅覚や聴覚では劣るが、反面、直感というか第六感というか、そうした面において非常に優れたものを持っている。それを馬鹿にするような者は長生き出来ない。

「なら、準備をしておいた方がよろしいですね」

そう呟いて、エルフ族にして魔術師であるドナが腰の道具を確認する。それに合わせるように、ドナの肩口付近を飛んでいたフェアリー族の男性医師であるアルムも薬を確認している。

全く、フェアリー族は男性と女性で賑やかさが随分と異なるからな……。医師などの多い男性が賑やかに騒ぎ立てるよりは、踊り子や手品師などを生業とする事の多い女性が賑やかな方が合ってるのは間違いないのだが。

おっと、自己紹介が遅れたが、俺はオウル。

獣人族の男性にして、侍だ。

この世界が神々によって基本が構築され、それを手伝う為に、そして将来の管理者となるべく、【六柱】が生み出されたのは前述した通りだ。

だが、世界を一から作るにはとにかく手が足りず、【六柱】も神々に倣い、自分達を手伝う者達を生み出す事にした。

この時生まれたのが竜人族、人族、エルフ族、ドワーフ族、フェアリー族、そして獣人族。生まれた順もこの通りだ。

個々で見れば能力に違いはあるが、生み出した存在の力はほぼ同等だったと伝えられている。種族生産ポイントをどのように割り振ったかの違いだと思ってもらえばいい。

例えば、竜人族と人族はその割り振りが最も正反対と言える種族だ。

個で見れば最強種と呼んで差し支えない竜人族だが、種として見るなら最弱の種と言っていい。

逆に、個として見るならば竜人族はおろか、他の種と比べても突出したものがない人族だが、種としての強さ。子を産み、育て、数を増やして繁栄するという面で見るならば六種族中最大を誇る。

肉体や特殊な能力に割り振った結果、種としての強さが最弱となった竜人族。

種としての強さに割り振った結果、他に回す余地が削れられた人

族。
個体ごとに自身の持つ特性に最も合う地、火山の火口であったり海中であったりと様々だが、他の種族が居住しないような場所に一体で留まり、他の種族とも滅多に顔を合わさない竜人族。
群れ、他の種を上回る規模の都市を築き、そこに他の種族も受け入れ、積極的に交流すると共に、仕事を分担し栄える人族。
正に、対照的な種族と言える。
エルフ族は魔術に優れた特性を持ち、ドワーフ族は何かを作る事に優れた才を持つ。
フェアリー族は男性は医療関係に、女性は娯楽に才能を持つとされる。
そして、俺達獣人族は男女で見た目が異なる唯一の種だ。
男性は頭部が犬科の動物のそれであり、嗅覚や聴覚は犬のそれに勝るとも劣らない。
女性は頭部に猫科の耳が人族と同じ位置にある耳とは別についているのと、瞳が猫科のそれであるのを除けば後は殆ど人と変わらない。ただし、その直感は下手な未来予知にも匹敵する程、危険を察知するのに優れている。
獣人族の男女で共通しているのは、尻尾が生えているという事ぐらいか。

さて、【迷宮】内部はその名の通り、道が入り組んでいる。
この【迷宮】はまだ若いせいでそこまで複雑な構造ではないが、これが年経た【迷宮】ともなれば、深さも複雑さも桁が違う。
そして、そこに生息する合成獣の数と危険度も、だ。
【迷宮】。
合成獣と時を同じくして出現した、世界を蝕む存在だ。
そして、その中には外に比べ、遥かに多くの合成獣が生息している。
だからこそ、メルキィの、獣人族の女性が持つ優れた直感は頼り

になる。無論、それが通じない場所や相手もいるから、過度に当てにするのは危険なのだが、そこは他の者がカバーするべき点だろう。
ピクリ、と俺の耳が動く。
「音がするな」
小声で呟いた声に、皆が緊張を高めた。
聴覚に関しては獣人族の男性を上回る種族など存在しない。
「……一体じゃない。複数いる。この足音だとそこまで大型じゃないな……ただ、この音からすると……硬そうだ」
メルキィさんがランタンの光を絞る。
さすがに【迷宮】では外の明かりは届かない。完全な暗闇でも視界が確保出来るのはドワーフ族ぐらいだが、さすがにランタンを煌々と照らして、合成獣であろう場所に近づくのは向こうに気付いて下さいと言っているようなものだ。
合成獣は獣とされてはいるが、それは知性がそのレベル、という程度の意味であり、感覚まで同じかは一体ごとに異なる。
何しろ、合成獣とは世界の歪みが六種族以外の精霊を、動物を、植物を、大地を、水を飲み込んで変異して生まれる存在だ。同じような場所で生まれた合成獣でさえ、何を飲み込んで生まれたかで全く異なる形態を構築する。水がぐねぐねと動き回るような合成獣もいれば、動物が入り混じったような合成獣もいるし、見た目は巨大植物にしか見えないような合成獣だっているのだ。
そして、どうやら、今回の相手はそこまで感覚の鋭い相手ではなかったらしい。
（この角の先だ）
そうハンドサインで後方に合図をする。既に全員が武器を構えている。
俺は刀を、メルキィさんは小剣を、ジンはメイスを、ドナは触媒となる杖をそれぞれ構えている。武器を構えていないのはアルムぐらいだが、元々フェアリー族の彼は直接的な攻撃にはほぼノータッチだから仕方ない。体のサイズの関係上、力には大きく劣るのだ。

全員に視線を向けると、黙って頷いた。
それと共に角から飛び出し、そちらへ視線を向けると同時に、メルキィさんが絞っていたカンテラを再び明るくする。
角を飛び出した先はちょっと広い空間になっていて、端まで光が届いていない。
だが、獣人族の目を甘く見てもらっては困る。これぐらいの光源があれば、相手を確認するには十分だ。
「岩石系の合成獣だ！数は四！」
俺が叫ぶのと前後して、ドナが光の精霊魔術を放つ。
火と風の精霊の力を借りて用いるこの魔術は部屋全体を照らし、既に確認していた俺とメルキィさん以外の視界を確保する。
岩石系の合成獣は感覚も動きも鈍い。
だが、反面、力は強く、何より硬い。
他の種族にとっては余り相対したくない敵だろうが、俺達獣人族にとっては実に楽な相手だ。
それが分かっているからだろう。
即座にドナがメルキィさんからカンテラを受け取ると共に、ジンが盾となる形で他の者は通路に下る。部屋に残るのは俺とメルキィさんのみ。武器は刀と小剣で、俺達は共に鎧というべきものをまとっていない。
知らない者が見れば、岩石系の合成獣に相対するような装備には見えないだろうが、俺達にとってはこれで十分。
気を巡らせ、武器に体にまとう。
この『気』こそが獣人種の最大の特徴。
かつて合成獣が初めてこの世界に出現した時、争いがなかったが故にまともな武器が、鎧がなかった時代、彼らと戦う為に獣王によって生み出された種族、獣人族。
武器の、鎧の代わりを為す為に与えられた『気』は、まとう事によって素手で岩石を割砕き、手刀で相手を切り裂き、何の変哲もない衣類が全身鎧に勝る。まあ、反面というか獣人族は魔術が全く使

用出来ないのだが。
だからこそ、こうした動きの鈍い相手には獣人族にはカモだ。
目の前にいる合成獣は一体は四足獣の形状をしているが、残る三体はいずれも人型。うち一体が一際でかく、体高はおよそ四メーター近く。他は人族の一般的なサイズとそう大差はない。
動物形状の合成獣の動きが心配だったが、どうやら単純に他よりまとっている岩石が分厚いだけのようだ。それで二足ではバランスが維持出来ず四足の形状に変形したか。動きの機敏さ自体は他と大きな違いはない。
俺とメルキィさんが前へ飛び出す。
俺は一際大きい巨人へ、メルキィさんはまず他の人型へ。
踏み込み、俺は下から切り上げる形で足を断つ。
岩石といえど、気をまとった刃に対抗する術はない。豆腐を切り裂くように刃は奴の足をすり抜け、俺は後退する。足を断ち切られた奴は案の定バランスを崩し、転倒。これに巻き込まれたらさすがに堪らない。何しろ、重量は見た目通りの相手だ。
幸いな事に奴は前に倒れてこんでくれた。
これが後ろに倒れるとまた近寄るのに面倒だったんだが……ありがたい。
こいつのコアの位置は頭部。まるで単眼のように頭部の中央で赤く輝いていた。おそらくはこいつなりに攻撃しづらい位置へとコアを移動させていたのだろうが、この状態ならば、「さあ、どうぞ」と言わんばかりに差し出されたも同然だ。
一見すれば。
合成獣の厄介さはここにもある。
俺は奴の頭部の様子を頭に叩き込みながら、一撃を放つ。それによって頭部を両断し、そこから見えるコアの様子を確認する。よし、と心の内で呟くその視界の内で、コアがその赤い輝きを失った。
合成獣はいずれも心臓とでも言うべきコアを持つ。このコアを破壊しなければ合成獣は本当の意味で倒れた事にならず、放置してお

けばいずれそのコアが再び周囲の精霊や物質を取り込み、合成獣は復活する。そして、切断するにしても三分の一以上を一度に切り分けねば、破壊には至らない。どうもコアは本来の大きさの三分の二を下回ると維持出来なくなるらしく、こうして輝きを失い、合成獣としては死ぬ。

最低でも人の拳大より小さくはないのは幸いだが、こうした岩石系や植物系は割りと見える位置にあるのに対して、動物性は肉体の内にある為破壊がまた面倒なのだ。メルキィさんが短剣ではなく、小剣を使っているのも長さの関係がある。一定以上の長さがないと相手のコアに届かない可能性があるからだ。

俺が大物を片付けている間に、メルキィさんは次々と足に切りつけて、バランスを崩させていた。

他の人型岩石系合成獣は彼女に任せて大丈夫だと判断した俺は残る四足獣型合成獣へと向った。こちらは折角獣の形をしているのに獣ならではの俊敏さもなく、かといって亀などに代表される分厚い甲殻もない。脅威度が低いと見たからこそメルキィさんも後回しにしたのだろうし、事実、その通りだった。

「さすがですね」

コアを回収する中、ドナが笑顔で言った。これらのコアは精霊や生命の結晶と言える。魔法具など素材として使える事が分かってからは、質の良いものは特に需要が常に供給を上回っている状態だ。要は売って金になる。

「これぐらいなら誰でも出来るさ」

「獣人ならな」

どこか苦笑しているのはジンだ。

ジンは神官戦士だ。人族は単純な魔術ではエルフ族に敵わず、接近戦闘能力では獣人に敵わず、治癒術ではフェアリー族に敵わない。だがその汎用性は高く、それを活かして、魔術と剣を併用する魔法剣士や魔術と法術を併用する賢者などの複数の仕事を受け持てる分

野を選ぶ者が多い。
ただ、最近ではその汎用性故に、そして他種族との力の差故に、人族だけでパーティを組む者達が生まれるなど、隔意を持つ者が生まれているとされているのが悩みの種だ。
人族にも何かしら突出した才能があれば、そんな事もなかったのだろうが……。
ジンはそこまでは行っていないと思っていたのだが、先程の発言を見る限り自分では届かない領域にあっさりと種族としての力で超えていく者達に複雑な気持ちがある、のかもしれない。
「言っても仕方のない事だ。こちらとしては怪我がなかった事が有難いな」
アルムは治癒術を使う医師だが、「自分が暇なのはいい事だ」が口癖だ。別に悪い意味ではなく、医者が必要とされるのは怪我人か病気の者が出た時のみ、苦しむ者など少ない方が、すなわち自分が暇なのは良い事だ、という考えの為だ。
「とりあえず危険は特に感じないにゃ」
部屋に罠などないかを探っていたメルキィさんが戻って来た事で、ようやくほっとした空気が流れた。
「しかし、此度の【迷宮】は多彩じゃの」
ジンのぼやきも最もだ。
通常、【迷宮】はある種の特徴がある。
中には【迷宮】自体が植物の属性を持ち、蠢き、変異するもの。一定時間ごとに構造が組み変わるものやもっと極悪なものもあるというが、そういう意味ではこの【迷宮】は割りとオーソドックスな部類に入る。
ジンが多彩といったのは、その内部に生息する合成獣だ。通常、大抵は同系統の合成獣で占められるものだが、今回の【迷宮】は先程の岩石系だけでなく、水系、植物系に動物系と多種多様だった。
「確かに多彩じゃあるが、やはり場所柄だろうな……」
この【迷宮】がある土地は南方の密林地帯。普段は余り目につく

ような場所ではない。
俺達の所属する探索者ギルドの情報網に引っかかったのも、新種の薬草の素材探しの為に赴いたフェアリーの薬師のお陰だったという。世界の隅々まで目を行き届かせるには協調していても厳しいという実例だろう。これまで南方には【迷宮】の出現がなかった事もあり、監視網から外れていた事も大きいだろう。お陰で、俺達が本来探索の主体としている地方から引き抜かれてこちらに急派された訳だが。
そう、最初に北方に出現した【迷宮】は次第にまるで病が広がるように世界に拡散していたが、それは北方から北東や北西へと広がっていた。これで安全圏と思われていた南方にも監視の網を広げなければならなくなった事はギルドにとっても痛手だろう。
「さあ、行こう。最奥部にはもう少しだろうしな」
俺の言葉に全員がそれぞれに声を返し、立ち上がる。
俺の言葉は根拠なしに言っている訳ではない。【迷宮】はどういう訳かその最奥に近づく程に明るさが増す。この付近は人族やエルフ族など夜目の効かない種族にはまだカンテラが必須だろうが、俺達獣人族のような夜目の効く種族ならば既にカンテラなしでも視界が確保出来るぐらいになってきている。
先程も、俺達だけならば明かりの魔術も不要だったんだが、それだと万が一俺達が抜かれた時に食い止めるジンや援護を行うドナとアルムの視界の問題があったから、だ。ここでこれなら、もう少し進めばジン達もカンテラが不要になるだろう。

あれから更に時間が過ぎ、予想より時間はかかったものの、もう俺達はカンテラは使用してはいない。
時間がかかった理由は【迷宮】後半に必ずといって良いほど出現する罠のエリアが予想より厄介だった為だ。密林という土地柄のせいか、毒や水に関わるものが多く、用心しながら進んだら結構時間がかかってしまったのだ。

解除を行う獣人族の女性が直感に優れているといっても、正確な位置を把握するのは最後はつちかった技術、という事は世の常だ。いくら「何だか嫌な予感がする」と思っても技術や知識がついていってなければ、周囲を警戒しながら踏み出した足元で罠を踏んづけました、という事だって初心者の探索者では珍しい事ではない。要は何事にも絶対、なんて事はないという事だ。

幸い、メルキィさんは熟練の盗賊だ。幾つかは彼女をもってしても厄介なものだったらしいが、無事解除には成功していた。

「は～、疲れたにゃあ」

罠を解除する時は盗賊は孤独だ。

万が一に備え、他の者は距離を取るから一人突出する事になるし、罠を解除している最中は直感による危険感知も発動しっぱなしなせいで、もし、陰から合成獣が近づいてきていても気付かない。

そして、罠を発動させてしまった時、それが致命的なものならば自分が死ぬ可能性は高く、生き残れても仲間を失う可能性は決して低くはない。そうなれば、真っ当な者ならば責任を感じるだろうし、中には責める奴だっている。最悪、それでパーティが解散してしまう、という事だってある。

報酬時の盗賊の取り分が多めなのはそうした危険や責任の代価と言われるのは決して伊達ではないのだ。

「お疲れ様です」

アルムが鍼灸術で凝りをほぐしている。この鍼灸術、全身の要所要所へ魔力で編んだ針を打ち込むという術式だ。治癒術の方が外傷の治療や即効性のある疲労回復には優れているが、精神的な疲労回復や肩凝り、病気や重傷の後の体力回復などにはこちらが優れているとされ、日常の仕事の疲れの回復にはこれだ、という声も小さくない。

「あ～、そこ、効くにゃ～……」

こうしてのんびりした声をメルキィさんが出していられるのは、ここが最奥部であり、たった今、【迷宮】のコア回りの罠の確認を

終えた所だからだ。
合成獣同様、【迷宮】にもコアがあり、その最奥部でコアを回収する事で【迷宮】は終わりを迎える。最奥部と呼び、最深部と言わないのは、過去には途中の階に特に広い階があって、そこにコアがあった。つまり、その階を通り過ぎて更に下へ行ってしまうとコアが見つからないという詐欺みたいな【迷宮】もあったからだ。
まあ、その時は結構明るくなっていたのが、再び暗くなりだした事で「おかしい」と気付いたらしいが……。
「よっ、と……」
コアを俺とジンの二人がかりで外す。
ここのコアは台座にはめ込まれていて、ちょっと取り外しが面倒だったのだ。
取り外すと同時に、明度が落ちる。いきなり真っ暗になる訳ではないが、先程まで太陽の下みたいに明るかったのが、陽が落ちだしたようにわずかに翳った。これで、このコアが、この【迷宮】のコアであり仕事が終わったという事に確信が持てた。このまま放置しておけば、次第に【迷宮】はこの明るさを失っていき、それと共に崩壊が進み、最後は大地へと帰る。
即崩壊なんて事にはならないが、余り長居したい気持ちにはなれないな。
「ようし、それじゃ帰るか」
無事仕事が終わり、全員特に大きな怪我もない。
ま、合成獣はまだ残ってるはずだからまだ気を抜いちゃいけないのは確かだが、全員の顔は明るかった。

第一話ー冒険者の日常（改）（後書き）

こちらも大幅変更

第二話ーそれぞれの今後

コアを持ち帰った俺達は無事の帰還を祝い、祝杯をあげていた。
コア、と呼ぶがこれらは純粋な力の結晶であり、様々な魔術道具に実験用素材、武器の強化など転んでもただでは起きないというか、需要が極めて大きい。
だが、小粒のものはともかく、一定以上の大きさを持つコアとなると一気に数が減る。それだけに、今回の迷宮サイズのコアともなれば、それなりの収入が約束されたようなものだ。正規の報酬以外に予想以上の臨時収入確定となれば祝杯の一つもあげたくなるもんじゃないかね。

「乾杯！」

ある者はジョッキを上げ、ある者はグラスを上げる。

「いや、しかし今回は何とも面倒な仕事だったわねえ」

ドナが珍しくぼやく。
気持ちは分かる。今回の迷宮は冒険者ギルドのミスの為に、危うく失敗に陥る所だった。
迷宮とは成長するものだから、年経たもの程深く複雑になり、生まれたて程浅く簡潔になる。生まれた直後のものが見つかれば、入り口を入ってすぐにコアがある部屋、という事だってある。
今回はどうだっただろう？
当初冒険者ギルドより与えられた情報では誕生して間もないという情報だった。
ところが、侵入してみれば三年もの級の迷宮だった。
念の為に、脱出後周囲を確認してみた。もしかしたら、今回我々

が突入した迷宮は未だ未発見の迷宮であり、今回発見されたという迷宮とは別のものではないか、という可能性もあると思ったからだ。まあ、既に迷宮が広がっている地に新たに、という可能性はまずないが、ゼロではない。しかし、結局、周囲には新たな迷宮が見つかる事はなかった。

ギルドのミスであった事は、今回持ち帰ったコアが証明している。コアも成長する。あのサイズで生まれたての迷宮などという事はありえない。事実、コアを確認したギルドは謝る事しきりで、報酬の上乗せも約束してくれた。

……もっとも、我々としては次回はきちんとして欲しい、としか言いようがないが。想定外の儲けにはなったが、賭けるのは自分達の命だ。割に合わない。

そう、今回の仕事を思い返していると、ジンが口を開いた。

「今回の報酬次第じゃがな。わし、そろそろ引退しようと思う」

皆、驚きはしたが、同時に納得した。

ジンは現在３５歳。人族としては既にピークを過ぎている。逆に俺は今年で６１になるが、人族の大体３倍の寿命を誇る獣人族としてはまだまだ２０代。加えて、戦士の一族である獣人族は年を食っても身体能力が落ちない。

「そうか、それじゃあこれからは神殿に入って、後進を育てる側に回るのかな？」

アルムの言葉に、ジンは頷いた。

これまでの寄付で、神殿で役職が得られる事も決まったのだという。この世界の神殿は自分の前世が知る知識としての腐敗した神殿より遥かにマシじゃあるが、神殿だって慈善事業じゃやっていけない。かといって、人の判断、ではどうしても偏りが出てしまう。

最終的に選ばれたのが、誰の目にも分かりやすい功績と寄付だった。
仕事で功績を上げればそれは誰でも役職を得るに相応しいと判断される。多額の寄付が為されれば、それは神殿に誰でも貢献したと理解出来る。無論、下手をすればそれは神殿の役職の固定化、金のある人間が神殿の上の役職に就ける、という事でもある為まだまだ改良中、という所ではあるのだが。

「オウル君とメルキィちゃんは例の件に参加するんだって？」

アルムが今度は獣人二人に話しを振る。
俺達はそれに頷きを返す。
ギルドで募集しているあの件は……放置出来ない。

「そうですか、実は私もあの件には後方担当ではありますが参加予定なのですよ。なので、あちらでも会う事があるかもしれませんね」

「そうなのかにゃー。でも、先生のお仕事が必要な状況では会いたくないにゃー」

メルキィさんのある意味酷い言葉に、同感ですね、とアルムは笑っている。当然だろう、必要な状況という事はメルキィさんが大怪我を負った時の可能性が高い。医者の仕事なんてのは暇な方がいいのだ。
しかし、それは朗報だ。
アルムの医術はここの冒険者ギルドでも有数のもの。いや、この街を含めたこの地方一帯でも、というべきか。そんなフェアリーが後方に控えていてくれる、というのは有難い話だ。

「うーん、あたしはどうしようかなあ……ジンさんも引退して、オウル君にメルキィちゃん、アルム君までしばらくはいなくなっちゃうとなると……」

ドナさんは結構悩んでいるようだ。

彼女は本来は魔術師ギルド所属の研究職だ。

だが、魔術師ギルドのそもそもの設立理由は合成獣が何故誕生するようになったかを探り、今後新たな混沌の大精霊みたいな存在が誕生しないようにする為の方法を探る、というものだ。それ故に、合成獣と同じ源なのではないか、とされる迷宮の探索に魔術師ギルドがメンバーを送るのは決して少なくない。

また、研究職といっても無制限に資金が与えられる訳ではない。実績を出すか、或いは現場で汗を流すかする必要があり、ドナさんはエルフとしてはまだまだ若手ゆえに実地で汗を流す日々、という訳だ。しかし、当然ながら下手な奴についていったら自分が死体になりかねない以上、信頼出来る面子というのは彼女にとっても大事だ。

だからこそ、これまで幾度か組んだ事のある信頼出来る面子がいなくなるのは困る、という事だ。

「しかし、一体何があったんでしょうね、今回の依頼」

「さあ……あの土地はうちら獣人にとっても鬼門なのにゃー」

此度の一件……それはある土地の探索だ。

以前から異質な土地であるとの噂は立っていた。何しろ、その地では通常ならば絶対とも言える獣人の女性が持つ第六感が殆ど通じない。正確には、その地方に入るなり、第六感が警鐘を鳴らしっぱなしと言った方が正確なのだが。

昼間に星の光が太陽の光にかき消されるように、その地では余り

に鳴り響くが故に、他の危機全てを塗りこめてしまう。それは獣人の第六感も万能ではないという事の証明でもあった。
一時は迷宮があるのではないか、と疑われ、それが見つからなかった後は薄気味悪い土地として敬遠される事になった。……もっとも、土地自体は豊かな土地な為に入植者はそれでもいるのだが。

そんな土地なのだが、獣人の第六感が訴える地域は次第に拡大を続け、遂に最近では合成獣が見られるようになった為に、ギルドは正式に調査部隊を送り込み……これが全員消息を絶った。こうなると、ギルドとしても黙っていられない。

何かが起きている。

そう判断を下したギルドは前回の轍を踏まない為にも大規模な調査を行う事を決定。
これに必要な人員を周辺の街のギルドからも募集した次第だ。
危険は多いが、何かが起きている。そう判断せざるをえない状況に、先だっての迷宮突破によって緊急性のある依頼が落ち着き、ある程度以上の腕利きにとっては少し暇な時間が出来た事もあり、周辺ギルドも含めてそれなりのメンバーが集まりつつあったのだ。
まあ、参加すれば例え、別チームが功績を上げた場合でも、それなりの報酬が確定する、という点も魅力ではあっただろうが……。

「どのみち、ジンもドナも参加する可能性はあるんだろう？」

アルムがストローで飲み物を口にしながら言った。
サイズの関係上、フェアリー族用というグラスの製作にはどうしても割高になってしまう為、こうした共通の酒場などではグラスは人族サイズで代用する事になる。無論、フェアリー族用の家具などを専門的に作る工房もあるのだが。

「そうだのう。神殿としても部隊派遣は考えておるようじゃし」
「ですねえ、魔術師ギルドとしても原因不明なんて状況じゃあむしろ興味深々じゃないでしょうか」
ジンもドナもそれには異論はなかった。
そうして、その手の派遣となれば、現時点で冒険者をしているジンや、若手で現場経験もそれなりにあるドナにお鉢が回ってくる、という可能性は十分考えられる事だった。
「なんにゃ。それじゃ向こうでまた皆一緒って可能性もあるのにゃ？」
「じゃないかな？」
俺はメルキィさんの言葉に賛意を示しながら、グラスを傾ける。
まあ、さすがに可能性は低いだろうが……。

こうして、今は全種族が共存している。
けれど、俺の記憶はそれが何時まで続くのか、とふと疑問を感じさせる事がある。
人族が俺の記憶にある『人』と同じである以上、何時かは人は他の種族を飲み込んでゆくだろう。突出したものこそなくとも、何でも人族だけでこなせてしまう小器用さがある為に、人は何時か……そう、合成獣を相手にするにしても人族だけで何とかなると思った時、人族だけでまとまってしまう可能性がある。
千年の時間が過ぎた時、エルフ族はまだ祖父の代、当事者が生きている。彼らにとってはほんの少し前の出来事でしかない。
だが、人族は違う。人族にとって千年とは遥かな昔だ。

寿命が他種族に比べて短い、という事は同時に危機を忘れ去ってしまうのも、また早いという事だ。
もしかしたら、合成獣の実態が判明し、それが想像以上に危険な存在であり、今後も続くというのなら、それなら内面はともかく、表ではこうした共存が続いていくのかもしれない。
それでも、繁殖力の関係上、何時かは人は他の種族を飲み込んでいくに違いない。その中で各種族は果たしてどのような立ち位置を確保してゆくのだろうか……。
願わくば、せめて俺が生きている内は、互いに敬意を払える関係が続いて欲しいものである。
ふとそう思った。

第二話ーそれぞれの今後（後書き）

感想・ご意見募集中でーす

次回から、ある意味本編？

第三話ー不可思議な地で

その地方、エリザル地方は一見すれば特に何の変哲もない田舎である。

獣人族以外ならば、その地方に何の違和感も感じる事なく暮らす事が出来るだろう。ただ、川があり、森があり、そこで暮らす人々がいて……そんな土地だ。

だが、獣人族の女性の持つ第六感が強烈にこの地で警鐘を鳴らした事から事態は変わった。

もちろん、気のせいだと割り切る事も出来たであろうが、それをするには獣人族の女性のそれの精度が余りに知れ渡っていた。

念の為にと行われた複数人による確認によって、それが一人の勘違いではないと判断したギルドは正式に調査団を送り込むも、この時点では何も発見される事はなかった。その為、定期的な巡回ルートに加えつつも、この時点では対処は見送られたのである。

しかし、それから一年程の間に着実に『それ』を感じる範囲は拡大。

第二次調査隊が送り込まれ……今度は誰も帰ってこなかった。こうなると、放置も出来ない。何かがある事は間違いないのだ。

「まず今回の調査の一番の目的は、ここで何が起こってるかなのにゃ」

メルキィさんが皆に確認するように告げる。

結局、この地に集まったメンバーで臨時のパーティを組んだら、何時ものメンバーになっていた。

俺とメルキィさん。

神殿から送られてきた支援要員からジンさん。

魔術師ギルドの調査員ドナさん。

そして、班付の医療メンバーとしてアルムさんだ。
まあ、編成を決めたギルドとしても、組んだ経験のあるメンバーがいればその範囲で組むように編成したらしいから、ある意味当り前の話かもしれない。その方がパーティの生存度が高まるからだ。初めて組めば当然互いの呼吸が分からない。幾度か組んだ事があれば、互いの呼吸も分かる。
これは案外、馬鹿にならない要素になる。

「で、第六感は相変わらず……？」

「うにゃあ……さっきから鳴りっぱなしなのにゃあ……」

確認した俺に、メルキィさんはどこかぐったりした様子で頷いた。
幸い、ある程度経験を積んだ獣人はそれを無視する術も確保している。初心者の獣人はこの第六感の囁きに振り回される者も多い。危険を感知しても、どれがどれだけ危険なのか、それを判断する為の経験が足りない為に起きる。
実際、獣人の居住地が街中ではなく、郊外の村が主流なのはその辺りも大きい。街が大きくなればなる程、細かい危機も多く発生し、それが獣人の少女の精神を最悪壊しかねないからだ。まあ、普通はそこまで酷い状況にならないのは、さすがに獣王がある程度は調整してくれている、という事なのだろう、きっと。
もっとも、そうも言っていられない時もある。
現状、どこで第六感が働き出し、どこで途切れるのか。それだけでも重要な情報になる。
下手に遮断する訳にはいかない以上、彼女が疲弊するのは当然であった。

「そろそろ行くか。ゆっくりしていても仕方ない」

俺の言葉に全員が頷き、動き出す。
今回は俺がリーダー役になっている。メルキィさんは先の理由で指揮を執っていられる余裕があるか分からない状態だし、ジンは実質自分は引退した、と一歩引いている。ドナさん、アルムさんは共に自分が積極的に前に出て指示を出す性格ではない。
何とも緊張する話じゃないか……人を率いた経験なぞ前世記憶で上司になった記憶が少しあるだけだ。
そう思いつつ、俺達はその地方へ踏み込んだ。

「……普通だな」

「ああ、普通だ」

エリザル地方の農村。この地方には獣人以外の種族の村が一つはある。無論、竜人は除く。街がないのは、やはり何かがあると判断されているが故、だろう。
到着したのは、そんな村の一つ。人族主体の村だ。
まず俺達が探っているのは、人だ。
人族だけではない、エルフ族でもドワーフ族でも何でもいいが、獣人族が警戒を感じ始めた頃から村に流れてきた人間なりを探している。
もっとも、結果から言えば、この村でもそんな村人はいなかった。
流れ者、という存在を村という閉じた共同体は嫌う。現在の世界では冒険者という流れ者が普通に受け入れられているが、それも彼らが村に居座らない旅人であるからだ。旅人ではない流れ者が村に居つく事を、村は予想以上に嫌う。
もっとも、それは素性が分からない人間が居つく事によって、彼らが何をするか分からないという警戒が産む現象ではあるのだが。

もし、彼らが若い頃村を出て行って、そして戻って来た、という人間ならば、或いはそうした人間が仲間として連れ帰った相手ならばそこまで警戒される事はない。
それだけに、ここ二年余の間に急に住み着いた人間となると恐ろしく目立つ。

「とすると、やはり新興の村、か……」

しかし、この辺りはまだまだ大きな街がない事が示すように開発の途上にある地方であり、そして土地そのものは豊かな土地だ。流れてくる者の数は決して少なくはない。そういう者はそういう者達で新たな村を形成する事になるのだ、が……。
これまた当然の事ながら、そういう村は新しくこの地方に移ってきた者ばかりだ。おまけに、そうした集団の場合、怪しい行動などと言われても別の村の習慣などを持ち込んでいれば、最悪全員が全員を「そういえば」という事になりかねない。

「仕方ないでしょう。どこに新しい村があるか分かっただけでも儲けものですよ」

アルムが慰めるように空を飛びながら、俺の肩を軽く叩いた。
この村は比較的古参の村だ。それ故に、周辺に誰が移り住んできたか、どこら辺にそういう集団が村を作ったか、といった事に関しても情報を集めやすかった。どんな世界でも同じだが、楽をしようと考える者はどこにでもいる。最悪、野盗集団が入り込んでいるという可能性もあるのだから、村としてもそうした確認を行うのは当然だった。

「まあ、悪い事じゃねえけどさ」

面倒だよなあ。
オウルのその言葉には全員が同感とばかりに苦笑するしかなかった。

「やっぱり面倒だったな」

どこか疲れた様子で全員が頷いた。
疑われていると知って、気持ちのいい人間はいない。いたら変態だ。
新しい開拓村に移動して探ったはいいが、調べると一言で言っても、その手間は膨大だ。
例えば、子供一人にしても本当にその家の子供なのか、から調べないといけない。
さて、貴方が人の親だったとして、「貴方のお子さんは本当に貴方の子供ですか？」、直接面と向ってではないにせよ、周囲の人間にそんな事を聞かれていたとしたら……どう思うだろうか？
当然、好意的な反応が返ってくるなどありえない。
事情を説明した上で行えればもう少しマシだっただろうが、それでも白い目で見られるのは当然だった。
結局、全員で分散してなるだけこっそり行ったのだが、最後の方は睨まれながら、こそこそと逃げ出すように村を出る羽目になった。

「何かいい情報はあったかい……？」

全員が黙って首を振った。
誰もが似たり寄ったり。そもそも元々住んでいた土地で普通に暮らせていたならば、こんな所に流れてきたりはしない。
そして、まだまだ小さく新しいとはいえ、この土地で共同生活を

営む仲間である事には違いない。

「やはり、人を探すのは余り良くないのではないか？」

ジンが疲れた様子でそう言った。

俺もしばし考えて……頷く。

「そうだな、次はとにかく何でもいいから怪しいもの、疑問に思った事がないか聞いてみよう……」

その中に人の情報が混じっているかもしれない。

人の情報が混じっていなければ、それはそれで構わない。

それでいいかと確認すれば、全員頷いた。よし、次からはそうしよう。

第三話ー不可思議な地で（後書き）

何時もより若干短め

……何だか、突発的に新作思い浮かぶんですよね
昨日も新しいのが思い浮かんで一気に書き進みました
……もっとも、ネタと終わりは違うというか、最後のオチまで思い浮かぶのは一部なんですけど

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7534u/

神々のいない世界で

2011年9月12日23時56分発行